

『読書する習慣の定着を』

4月23日は「悪獣の生贄に差し出された王女を救った」というスペインのカタルーニャ地方の伝説の騎士、愛の守護聖人サン・ジョルディが殉教した命日にあたり、当地では「サン・ジョルディの日」として祝祭日になっています。その祝祭日の日に男性は愛する人に赤いバラを、女性は男性に「本」を贈り、愛する気持ちを伝え合うというのが習わしとなっているそうです。このことが、愛と知性の文化運動として日本に紹介されたのが、1986年（昭和61年）のことです。

4月23日は、文豪として名高いシェークスピアと「ドン・キホーテ」の著者セルバンテスの命日ともいわれています。

1995年（平成7年）11月にパリで開催されたユネスコの総会で「本のよさを再認識し、親近感を育むことを目的とし『世界本と著作権の日』を4月23日にする」という宣言文が採択されました。

日本においては、2001年（平成13年）子どもの読書活動の推進に関する法律が制定され、「国民の間に広く子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めるため・・・」という趣旨のもとに4月23日を「子ども読書の日」としました。

2002年（平成14年）の4月23日には、第1回目の記念日として、日本各地で趣旨にふさわしい事業が実施されました。日本中の学校で朝読書等の活動が活発になったのもこの頃からでした。

社団法人読書推進運動協議会が、毎年、4月23日から5月12日までを「子どもの読書習慣」と定めて、子どもの読書活動の普及・啓発を図っています。

このように子どもの読書離れを懸念し、社会全体で子どもの読書活動を推進させようとする動きは、かなり以前から取り組まれてきましたが、子どもが抵抗なく読書することができる習慣を身に付けるためには家庭での取組も欠かせません。学校で読書の時間があるからといってそれで十分とはいえません。家庭学習をすることと同様に毎日欠かさず読書するという習慣づくりが大切です。

毎日読書する子としない子では、国語力に相当の違いが生じます。読書する子は、その子の読書力の範囲までは、国語の力が簡単に伸びます。読書をしていても国語の力がつかない

ということがよく聞かれますが、それは、短期間の付け焼刃的な読書にとどまっているからです。

なかなか読書をしたがらない子どもにはどのようにすれば読書する習慣が身に付くかというと、毎日10ページと決めて読書させることがよいでしょう。10ページほど読むことは短い時間ですむので、毎日続けることにそれほど負担になりません。毎日の読書によって面白さを感じるといやがらないで読書が続くようになります。さらに面白い本に出会うとまたたく間に10ページ以上読んでしまっているということもあります。そのようなときに、「本が好きなんだね」などと声をかけ、褒めてやることが大切です。

「本を読みなさい」「頑張って読書しなさい」などと口で読書するようにいっても、なかなかその通りにいかないものですが、まずは実行させて、子どもが軌道に乗りかかったときにタイミングよく褒めることが効果的といえます。

1週間で2日か3日程度の読書では、面白みがつきません。毎日欠かさずの読書が面白みをつけるポイントです。なかなか読み進まない場合は、その子が内容をわかりながら読み進めることができる本を選ぶことが大切です。学年に応じた本とか、推薦されている本を選ぶことより、その子の読み進める能力に合った本がよいでしょう。

読書習慣の定着を図る取組を述べてきましたが、そう簡単にはいかないといわれそうです。子どもの個性や根気、興味・関心の示し方、それまでの成育歴など様々な要因によって定着に至るまでには、個々の子どもの特性に応じた幾通りの方法があるかもしれませんが、とにかく毎日続けるということが肝心です。

子どもたちには、読書することを通して語彙力や表現力を身に付け、人の生き方について深く考えたり、生きる力を養う糧としてもらうためにも読書の習慣を身に付けてもらいたいと切に願っております。